

E さんの交際

日本語教育研究科
中川真由美

- . はじめに
- . 動機
- . インタビュー
 - 1 . 言葉から人と関わるへ
 - 1 . 家族・親戚と
 - 2 . 友達と
- . 結論
- . おわりに

. はじめに

このレポートは、わたしが魅力的だと考える友人にインタビューをし、その中でわたし自身が考えていったことをまとめたものである。インタビューを通して、当初考えていた彼女の魅力というものが徐々に変化していくことになるのだが、ここで、わたしはこのレポートのテーマを「彼女の人間関係の作り方」としたい。

以下は、インタビュー前の動機である。

. 動機

わたしは、今回のインタビュー相手としてEさんというイラン出身の19歳の女性を選んだ。彼女は、現在わたしが日本語を教えている語学専門学校のアラビア語科2年に所属している。聞いた話では、彼女は10年以上日本で暮らしているということだ。そのためか、彼女の話す日本語（東京弁）は地方出身のわたしより自然に聞こえる。彼女の日本語を聞く限りでは、母語ペルシャ語との相当なバイリンガルなのだろうと思う。

わたしが彼女に魅力を感じる場所は、それらの言葉を話す彼女にある。ペルシャ語を話す彼女も、日本語を話す彼女も、わたしから見るとどちらも変わる事のない同一の存在であるように感じられ、わたしはそこに彼女の強さを感じ、惹かれるのだ。それは、彼女の中では感じたことや考えていることなどがすべて一つの、同じところにまとまっていて、そこから表現されるので、日本語・ペルシャ語と出てくる言葉は違ってても、一貫性があるように感じるのかもしれない。わたしにはそれがとても不思議で、また羨ましくも思える。

そして、そんな彼女のところには自然と人が集まるようだ。専門学校でも、昼休みや授

業後など、よく誰かと一緒にいる姿を見かける。といっても、いつも同じ人とというのではなく、他学科の学生をはじめ、留学生や仕事で語学研修に来ている人、アラビア語担当の講師や事務室の人などとさまざま。電話をかけたときなど、たいてい誰かが家に遊びにきているところだったり、誰かのうちに遊びに行っているところだったりもする。友達からも相談を受けることが多く、時には遅くまで学校に残って、話し込んでいることもある。「Eさんにはいろいろ話聞いてもらったから」、「この間Eさんと遅くまで語ったよー」など彼女についてよくこんな声が聞かれる。

また、自分からも人を集めようとしている。学校のみんなでバスケするから、 の家で飲み会するから、今度みんなでトルコ料理のお店に行くんだけど、とわたしにイベントの誘いがあるのは決まって彼女からだ。その場合、そのイベントの企画者は彼女ということが多い。

こんな彼女に魅力を感じるのは、わたし自身は日本語を話す自分と他の言語を話す自分が少し離れた別の存在としてあるように感じる、ということがときどきあったからだと言える。わたしは高校時代に一年間、留学生としてイギリスでホームステイした経験があるのだが、そのとき日本語の自分と英語の自分が別物のように感じるがあった。それは、わたしの中に新しい自分を発見したという意味では、楽しくて不思議な感覚だったが、一方で自分が2人いるようでとても気持ちが悪かったのを覚えている。

そのようなわたしに対して、彼女はペルシャ語と日本語二つの言葉をもって生き生きとした人間関係を築いているように見える。そして、更に新しい言葉としてアラビア語も学んでいる。これはいったいどういうことなのであろうか。今回のインタビューでは、わたしが彼女について感じていることを彼女にぶつけ、彼女にとってのペルシャ語・日本語とは、また現在彼女が勉強しているアラビア語との関係について探ることを通して、言語を話すということは一体どういうことなのかについて考えてみたいと思う。

．インタビュー

1．言葉から人と関わるへ

さて、インタビューといってもどのようなことから始めればいいのか、いまいち分からない。普段は友達のように接している彼女とも、いざインタビューとなるとお互い少し緊張してしまう。会話を録音するとなると更に緊張だ。

どう切り出していいか迷いながら、まずは、用意した質問項目に沿って、彼女にとってペルシャ語と日本語はいったいどういうものであるのかについて聞いてみた。わたしが話す言語で別人格になったように感じるようなことがあるように、それは彼女にもあるのだろうか。

「母語のペルシャ語と日本語はどのような関係？」

「日本語で話されたときは、日本語で考えるし、ペルシャ語で話されたときは、頭がペルシャ語に切り替わる。別々のものって感じかな。今の自分の感覚では、ペルシャ語の能力より、日本語の能力のほうが上だって感じる。ぼーっと考え事をしているときなんかは、日本語で考えていることのほうが多いと思う。」

「それじゃあ、イラン人とか日本人と言われることについてどう思う？」

「イラン人と言われても、日本人と言われてもどっちでもいい。特に気にしないかな。前に、留学生で仲良くしている友達から『Eさんさんはイラン人じゃありません、日本人です。』と言われたこともあるよ。でも、自分では『自分はイラン人』と思う。」

「なぜ自分はイラン人だと思う？」

「周りにいるイラン人、例えばいとこなどと考え方や行動が似ているから。親戚だからってことじゃなくて、なんとなくそう感じる。でも、母親からは、私は日本にいたときは日本人っぽくて、イランにいたときはイラン人っぽって言われたことがあるかな。」

「それって具体的にどういうこと？」

「日本にいたときや、日本語を話すときは性格がきつくて、口が悪くなる。それで、イランにいたときや、ペルシャ語を話すときは大人っぽくてやさしい感じになる、って。」

「そのことについて、自分ではどう思う？」

「自分でも日本語を話すときとペルシャ語を話すときは、何かが違うことはわかる。でも、特に気にしない。自分の中ではいつでも同じ。嫌だとか感じることはなくて、そんなもんかなと思う。しょうがないかなって。」

わたしが不快に感じている言語によって自分が変化することについて、彼女はその違いを認めつつ、それをそのまま受け止めているようだった。これは、小さい頃から現在に至るまで二つの言語に触れてきたからなのだろうか。そもそもわたしの一年間の留学と比較することに無理があるのかもしれない。

それではとアラビア語という新しい言語を学んでいることについて、聞いてみた。

「どうしてアラビア語を勉強しようと思ったの？」

「本当はペルシャ語を勉強したくて、それができる専門学校を探してたんだけど、なかなか見つからなくて。この学校でペルシャ語が勉強できると知ったんだけど、専門課程にはペルシャ語がなかったから、同じ文字を使うアラビア語にしたんだ。」

これは少し意外な答えだった。アラビア語は第二外国語としてというよりも、今までの自分の言葉ペルシャ語のために勉強していると言うのだ。それはなぜだろうか？

「なんとなくペルシャ語の文法が不十分だと思うからかな。ちゃんと勉強したいと思

ったし、話さないと忘れそうだから。前にイランに帰ったときに、自分のペルシャ語が鈍ってるって感じたし、そのとき周りの人からもそんな風に言われたから。ときどき言いたいことが、ちょうどいい言葉で言えないこともあるし。」

この辺でわたしはだんだん気が付いてきた。インタビューをしていても、いまいち面白いと感じないのはなぜだろうか。インタビューでは彼女と言葉の関係について聞いてはいるものの、なんとなく自分の求めていたものとは違う気がしていた。そして、Eさんがペルシャ語にこだわる理由を聞いたとき、すぐには気が付かなかったが、後になってだんだんわかってきたような気がする。現在、もっぱら日本語での生活をし、それで特に問題のない彼女にとって「ペルシャ語が鈍ってる」ことは何が問題なのだろうと考えたとき、実は彼女は言葉自体にこだわりがあるのではなく、ペルシャ語を使って話したい相手がいるからこだわるのかもしれないと思うようになってきた。全く当たり前と言えば当たりのことだが、彼女は人と関わりをもつために言葉を使うのである。

ここで一旦動機に戻って考えてみると、わたしが考えていたEさんの魅力というのは、言葉をうまく使いこなしていると言うよりも、実は人との関わりやそのつながりを大切にしているということなのではないだろうか。彼女がいつもいろいろな人と話をしようしたり、大人数が集まるイベントを企画したり、親戚や友達の家を頻繁に行き来したりしているのは、そういう人間関係を大切にすることからではないか、と考えるようになってきた。

2. 家族・親戚と

わたしのこのような考えを確認するためにも、もう少しEさんがイランという国とペルシャ語にこだわる理由を聞いてみようと思った。それについての彼女の答えは、「親戚づきあいがしたいから」。日本にも親戚はいるけれども、やはりイランにいる親戚のほうが数は多いとのこと。その彼らと付き合いたいから、というのが彼女がイランとペルシャ語を大切にしている理由なのだという。やはり彼女は言葉そのものではなく、その向こうにいる人を見ているのだろう。

それでは、今度はなぜ親戚とそれほどまでに付き合いたいのかという疑問が湧いてきた。

そういえば、普段から彼女の話には家族や親戚の話がよく出てくる。いところ飲みに行ったとか、週末は親戚の家に遊びに行ったとか、妹が何々をしたというようなことだ。また、わたしを含め何人かで遊びに行ったときでも、夕方になるとよく家から電話がかかってきていた。話を聞くと、彼女が一人暮らしをしていた頃は、彼女からも2・3日に一度は妹に電話をかけていたそうである。

家族のことを言うと、わたし自身は家族と連絡を取るのはいざい月に1度くらいしかない。それも、事務的な内容が多く、必要に迫られて連絡するという感じでしかない。電話をしたついでに近況報告をしようか、というくらいだ。ましてや弟の携帯電話に電話をかけて話をしようなどとは考えたこともない。別に仲が悪いとかそういうことでは全くない。ただ、わたしにとっては、家族はわざわざ連絡をとらなくてもつながってられる存

在と考えているからなのだ。

「どうして家族や親戚に頻繁に連絡するの？」

「どうしてって…、気づいたら連絡してる。話したいとか、会いたいって思う。彼氏と彼女みたいな関係じゃないかな。変な意味じゃなくって、どっちかが連絡しないと、あーじゃあ連絡してみよっかなとか、何かあったんじゃないかってちょっと心配になるんだ。」

「そんなにしょっちゅう連絡とるのって疲れない？面倒だって思ったりさ。」

「面倒って思うこともあるよ。でも、どうしてんかなーって気になるし。イランに帰ったときはすごい忙しいよ。1年に1回しか帰らないから普段会えないじゃん。だから、この間帰ったときは毎日いろんな人に会いに行ってたよ。疲れるけど、全然嫌じゃない。楽しいって思う。」

確かに、わたしも実家に帰ったときにぜひ会いたい親戚はいる。でも、数で言えば彼女のそれには遠く及ばないだろう。せいぜい三人くらいだからだ。他の親戚は会えればまあ嬉しいが、会ったからといって特に話したいこと、聞きたいことはあまりないというのが、正直なところかもしれない。なぜわたしがその三人にはぜひ会って話がしたいと思うかと言えば、小さい頃からのつながりが深かったからだとと言える。つながりが深いというのは、共有してきた時間の長さもあるが、どれだけお互いが本音の話ができたかということでもある。時には愚痴の言い合いのようなことにもなるけれど、悩みを打ち明けられるときもあれば、相談するときもある。そのような人とならば、会って話をしたいとも思うし、そのことで疲れても全く嫌だとは思わない。

ということは、わたしにとっての親戚三人のような存在が、彼女には会うのが忙しいくらいたくさんいるということなのかもしれない。このようなやりとりからも彼女は人との関係を大切にしているだろうことが分かってきた。

彼女にとって家族・親戚とは何か、気になって聞いてみた。かなりの時間考えた後、最初に返ってきた答えは、「考えてもわからない。言葉にできない。」だった。言葉で表すことができないくらい大きいな存在で、何でも話せて信用できる人たちなのだという。彼女によると、友達などの場合は仲が悪くなって縁を切ることもあるだろうけれど、家族や親戚はそうではない、「やっぱり最後に残るのは家族・親戚」なのだそう。

3. 友達と

それでは、Eさんは友達との関係についてはどのように考えているのだろうか。

わたしは悩み相談だけでなく、自分が今興味があることやこれは大切だと考えていることなどは、いろんな人に話すというよりもむしろ一人か二人に集中して話すことが多い。そのほうが、時間もかけられるし深く話ができるからだ。といっても、実際はそれを意識

して少ない人数に限っているわけではなく、話をしてみて興味深いフィードバックがもらえると感じた人とは自然ともう少し深い話がしてみたくなるし、次に会ったときはこんなことを話してみようという気になるからだ。そうしているうちに、気が付くと一人二人に絞られていることが多い。そんなことを彼女に話してみた。

「わたしもねえ、高校のときはずっと一人の友達にしか全部話してなかったの。でも、今の学校に入ってから変わった。なんかみんなに話してるなーって感じる。フレンドリーなところだからさ。」

「今の専門学校に入学したからなの？」

「うん、だって去年イランに帰ったとき、「考え方変わったねー」って言われた。高校のときはイランに帰ったときも、従兄弟（男の人）とはあんまりしゃべらなかったのね。なのに、今の学校に入ってからイランに帰ったときは、従兄弟と急に仲良く話したから、向こうがびっくりしてた。」

何人もの男友達を持ち、その中の一人を大親友だと言っている今の彼女からの意外な一言だった。彼女が変わったというその原因を再度確かめてみたが、やはり今の専門学校に入ったからだと言う。「みんなが仲がいい雰囲気だから」と言うが、ただそれだけなのだろうか。

わたしがあまり多くの人と深い話をしながらない他の理由としては、たくさんの人と話すところから出てくる様々な意見に自分が混乱してしまうことがあるからというものもある。ただ、それもEさんやその他の影響から、最近少しずつ変わりは始めている。そんな今の自分の状況も踏まえつつ聞いてみた。

「いろんな人と話すと、どんないいことがあるの？わたしは友達関係って広くて浅いよりも、狭くても深いほうがいいように思うんだけど。」

「でもやっぱり、友達はたくさん作りたいな。いろんな人と話すと、いろんな話題が出てくるし、いろんな性格がわかるじゃん。この人はこんなこと考えてるんだなーとか。」

「そうすると、例えば悩み事の相談なんかでも、こっちの人とあっちの人と違ってることが違うでしょ。」

「そんなもんでしょ。でも、いろんな考えを聞いてみたい。いろんなアドバイスを聞いて、考えて、結果を出す。気に入ったのだけ持ってきたりとかもあるし。話を聞いてそれに従うときもあるし、従わないときもあるよ。」

他の人の意見に流されやすいからというわたしの言葉に対して、彼女もそうだと言う。場合によっては、もらったアドバイスをそのまま取り入れてみることもあるそうだ。ただ、彼女の基本的な姿勢としては、「この人のも混ぜて、自分のも混ぜて」。自分がもともと持っていた考えに他の人からの言葉を加えるということらしい。たとえば、就職活動中の彼女はペルシャ語を使う機会の多い仕事を探している。その方法として、駐日イラン大使館

を通して仕事を紹介してもらおうとコンタクトを取っているのだそうだ。それは、両親とも相談して彼女が決めた職探しの方法なのだが、それについて先日友人から別のアドバイスをもらったと言う。今の語学専門学校にはEさんもよく知っているペルシャ語の講師が何人か所属している。まず、身近にいるその人たちに就職の相談をしてみれば、コネクションで仕事が紹介してもらえるかもしれない。そこから就職活動を始めたかどうかというものだった。そのアイデアは、Eさんにとってその時までは考えたこともなかったもので、ためになったと言う。そして、その結果彼女が出した現時点での結論は、まず大使館で情報を集めて、最後に先生のところに相談に行こうというものだそうだ。もらったアドバイスと自分の考えを「混ぜて」考えた結果なのだろう。

ここまでのインタビューで、Eさんは多くの人とのつながりを大切にし、その人達からもらう様々な意見やアドバイスに影響を受けながら、うまく付き合っているように感じられる。それでは、新しい人間関係を作ることについてはどう考えているのか聞いてみたいと思った。わたしは彼女が飲み会をよく企画することと関係があるのではないかと考え、彼女にとって飲み会はどんなものなのかを聞いてみることにした。わたしにとって飲み会は、普段はお互いの時間が合わず、なかなか落ち着いて話すことがないような人とゆっくり話をしたり、友達と恋愛や仕事などについてじっくり相談できる機会を与えてくれるものだと思っている。だから、みんなで乾杯をしたり、ゲームをしたり、大人数で輪になって話をする時間よりも、むしろ場が落ち着いてきて少人数のグループに分かれて話し始める時間こそ飲み会の醍醐味だと考えている。このわたしの意見に対して、Eさんは「わたしはわいわいやってる時間も、まったり語ってる時間もどっちも面白いと思う」と答えた。なぜ？と聞くと「いろんな人と知り合いたいし、いろんな人と話がしたいから」と言う。知り合いだから飲み会に誘うのではないか、飲み会で知り合うというのはどういうことだろうかと一瞬考えてしまった。しかし、考えてみれば、彼女の企画する飲み会やイベントに来る人の中には、口コミで来た人や友達の恋人など、彼女が直接は知らない人が混ざることときどきある。また、飲み会の会場だった店の店員を二次会のカラオケに誘い、驚かされたこともある。たぶんEさんは彼女にとって新しい人を積極的に飲み会に呼び込み、その中で「わいわいやってる時間」を通して、更に新しい交友関係を作ろうとしているのだろうと思う。いくらなんでも、初対面の人と初めから「まったり語る」ことは難しいから、彼女にとっては「どっちも面白い」のだろう。

飲み会にそういう利用の仕方があったのかと気づかされた瞬間だった。

最後に、Eさんにとって言葉を話すこととはどういうことか聞いてみた。「輪を広げること」。これが彼女の答えだった。

・結論

ここまで話をきて、結局Eさんの魅力とは一体なんだったのだろうかと考えてみる。このインタビューを始める前は、彼女と彼女の話す言葉に焦点があてられ、それがテーマ

となっていた。しかし、インタビューを進めていくうちに当初自分が魅力として見ていたものは彼女の表面的なもので、実は彼女の魅力というのは、言葉を使って人間関係を作っていく姿勢にあるということに気が付くようになった。そして、具体的に家族とのつながりや友人関係などについて話していく中で、彼女の魅力がより明確になってきたように思う。

自分にとって大切だと思う人とために連絡を取り合い、その相手を気遣う姿勢

いつも家族や友達などの様子や状態を気にかけて、直接的なコミュニケーションをとり続けようとしていること。

多くの人との関わりの中で影響を受けつつ成長していこうとする姿勢

できるだけいろいろな人からの意見やアドバイスを受け、それを自分なりに消化してよりよい方向に進もうとしていること。

人間関係の輪を広げようとする姿勢

人と知り合う機会を自ら設け、積極的に関わることで常に新しい人間関係を作り、彼女自身の個人的ネットワークを広げようとしていること。

これらを総合して考えてみると、わたしにとっての彼女の魅力とは、たくさんの人と積極的に関わることでいろいろな意見に触れ、その影響の中で成長していこうとする姿勢なのだということになる。

それでは、動機の時点で書いた「日本語を話す自分と他の言語を話す自分が少し離れた別の存在」のように感じていたことというのは、結局何だったのか。その答えも彼女とのインタビューを通して分かったような気がする。

それはつまり、その場の人間関係における自分の立場（役割）の違いによるものだろうと思う。わたしには、娘、姉、学生、先輩、後輩、初対面の人など様々な立場がある。そして、それによって話し方や態度が微妙に異なっている。日本語を話していても自分は時と場合、その場の人間関係によって変化しているのだ。今振り返って考えてみると、言語によって自分が変わるというのは、ここからきているのではないかと思う。本来ならば同じ言語内でも自分の立場や役割は変化するものなのに、その変化を言語の違いによるものと捉えていたのかもしれない。

また、留学から帰ってきた直後、わたしは家族や友達などから「性格が変わった」と言われたことがしばしばあり、自分でもその変化になんとなく気づいていた。そのことについて、わたしは、英語を話す生活をしてきたからだと考えていたのかもしれない。だから、突然日本語の生活に戻ったときに以前の自分とのギャップに気づき、英語を話す自分が日本語の自分に影響を与えたのではないかと感じた。しかし、実際は言語の問題ではなく、そこでわたしが出会った人々の影響によるものだったのだろうと今は思う。つまり、わたしが接した様々な人からの影響による変化を言語の違いによるものと考えていたということだろう。やはり結局のところ、人間関係なのだ。

今回のインタビュー相手 Eさんは、積極的に人の輪を広げ、そこで触れる様々な考えから成長しようとしているようにわたしには見える。確かに、広く人と関わることは大切だろう。しかし、やはりわたしは単に広い人間関係だけではなく、たとえ狭くても内容について深くじっくり話し合える関係も大切にしたい。そうすることで、自分自身の考えもより深まり、明確になると思うからだ。ただ、広い人間関係を築くことは、それだけ濃い内容の話ができる人に出会う可能性が大きくなるということを考えれば、まずは多くの人と知り合うことも同じように重要なのだろうと今は思う。

これが、Eさんの言葉で言う「この人のも混ぜて、自分のも混ぜて」考えた結果、わたしが出した結論である。

・おわりに

わたしはこの3ヶ月間の活動を通して、「自分の言葉への疑問」と「他の人の言葉を認識する自分への疑問」を強く意識するようになった。つまり、わたしの言葉は、わたしの本当に言いたいことを的確に表現しているのかということ、そして他の人の言葉をわたしはこのように理解したが、それはその人が本当に伝えたかったことなのかと意識するようになった。

「さんって、すごいよねー。」

「ほんとすごい。」

以前は、そのまま流して聞いていたり、自分自身も口にしていたようなやりとりが、今はとても気になる。このような会話では、いったい何を伝え合い、何を理解しあっているのだろうか。

自分の伝えたいことを抽象的にぼんやりと表現し、後は相手が「行間を読」んでくれるのを期待していた自分に気がついた。自分の中では「当然」とか「普通」と思っていたことが、他の人から見たら「新鮮」だったり、「ユニークな」意見だった。インタビューした相手の言葉やクラス内でのコメントや他の人のレポート内容は、よくよく話してみると、わたしが初めに捉えていたものと微妙なずれがあったり、今までにない新しい発見があった。これらは、「自分の言葉への疑問」と「他の人の言葉を認識する自分への疑問」を意識するようになった結果だと思う。

そして、そのような場面にしばしば出てきたのが、「なぜ?」「どうして?」「例えば?」「具体的に?」「あなたは?」「わたしは?」などの質問だった。なぜ自分はこんなことを考えるのだろう、これは具体的な表現で言うとどうなるかと自分に聞くこともあれば、相手の言葉をもっとよく考えるために、またより分かってするために、どうしてそのように言うのか、例えばどんなときそう思ったか、あなたの考えは、わたしはこのように捉えたけれどなど相手に確認することもあったし、それらの質問を浴びることもあった。それは、普段このような作業に慣れていなかったためか、ある意味とても厳しく、つらい経験だった。しかし、その結果自分の考えを自分の中だけに留めるのではなく、一度自分の外に出すことを通して、より具体的に意識化できるようになり、また人の言葉を解釈する際

の自分の判断・理解の扱い方などが見えてきた気がする。

ここで、結局日本社会に暮らすとは何かと考えると、それは「なぜ?」「どうして?」「例えば?」「具体的に?」「あなたは?」「わたしは?」によって、自分と相手とを確認していく作業、そしてその中で自分に必要な人間関係を築いていくことなのではないだろうか。そうすると、必ずしも日本社会でなくて構わないということになる。どの社会であろうと関係なく、個人のネットワークのようなものを作り上げていけばいいのだ。そして、自分の言葉に対して「なぜ・どうして・例えば・具体的に・わたしは」を掘り下げて表現すること、また相手の言葉を「なぜ・どうして・例えば・具体的に・あなたは」によって理解を深めていくこと、これが言語文化なのだ、と今の私は考えている。